

平岡 和¹: 報告—第38回日本植生史学会・日本花粉学会第64回大会巡検—南薩の火山と植生—
Nodoka Hiraoka¹: Report—The excursion of the 38th Annual Meeting of the Japanese Association of
Historical Botany and the 64th Annual Meeting of the Palynological Society of Japan

2023年12月4日に第38回日本植生史学会・日本花粉学会第64回大会巡検—南薩の火山と植生—が鹿児島県指宿市を中心として開催された。今回の巡検の案内人は長年にわたり火山や地質を研究されている大木公彦氏（鹿児島大学名誉教授）、世話人は吉田明弘氏（鹿児島大学）、中村直子氏（鹿児島大学）、大西智和氏（鹿児島国際大学）、真邊彩氏（鹿児島県教育庁文化財課）、浦 蓉子氏（奈良文化財研究所）、林 竜馬氏（滋賀県立琵琶湖博物館）により実施された。参加者は主に日本植生史学会と日本花粉学会に所属する32名だった。

当日は、午前8時30分に鹿児島中央駅西口をバスで出発し、9時30分頃に鹿児島市喜入町のリュウキュウコウガイ（メヒルギ *Kandelia obovata* Sheue, H.Y. Liu et W.H. Yong の別名）の群落に到着した（図1）。メヒルギはマングローブを構成するヒルギ科の一種で、熱帯アジアから九



図1 喜入のリュウキュウコウガイの群落（真邊 彩氏提供）。



図3 ソテツの根元に生えたホソバワダン。

州南部まで分布している。群落の由来の詳細は不明だが、この喜入の群落が自生の北限地とされ国の特別天然記念物として保護されている。参加者は整備されたボードウォークを歩き各自でメヒルギを観察した。

オクラソフトクリームが有名な道の駅いぶすき彩花菜館で休憩後、11時頃に指宿市の山川製塩工場跡やソテツ *Cycas revoluta* Thunb. 自生地を見学し、参加者全員で開聞岳を背景に記念撮影をした（図2）。伏見海岸沿いに位置する山川製塩工場跡には、昭和39年の操業停止後も、温泉熱を利用した塩田跡と泉源が現存している。また、鹿児島県はソテツの自生の北限であり、海岸付近には朱色の種子をつけたソテツが多く生育していた。当地では、毒抜きしたソテツの種子を食用としていると大木氏から伺った。ソテツの根元には、海岸の岩場によく見られるホソバワダン *Crepidiastrum lanceolatum* (Houtt.) Nakai（図3）や



図2 指宿市山川での記念写真（上中央子氏提供）。

ツヅグキ *Farfugium japonicum* (L.) Kitam. なども生育していた。改めて周囲を見渡すと、常緑広葉樹林が発達した南薩では冬でも植物の緑が目立ち、札幌から参加した筆者は南日本にいたことを実感した。

昼食には、くり屋食堂の海鮮料理を頂き、午後から指宿市考古博物館時遊館 COCCO はしむれを見学した。館内の展示のメインテーマは橋牟礼川遺跡を中心とした南九州の古代史だった。橋牟礼川遺跡は火山災害遺跡として知られており、開聞岳の火山灰層を境に上層から弥生土器、下層から縄文土器が出土し、両者の時代差を初めて証明したことで国指定史跡に登録された（指宿市考古博物館, 2024）。展示室には、西暦 874 年の噴火により、火山灰の中で空洞化した建築材に石膏を流し製作されたキャストや立ち枯れた樹木など遺跡の火山災害に関する資料が展示されていた。さらに、縄文時代と弥生時代の料理を復元した展示や吹上町花熟里遺跡から出土した古墳時代の炭化イネの展示などもあり、南九州における古代以前の人々の暮らしぶりを垣間見ることができた。

午後 1 時 30 分頃から県指定天然記念物の揖宿神社の社叢を散策した。揖宿神社の入り口にある社号標は溶結凝灰岩で作られており、側面には溶結し圧縮した噴出物が確認できた（図 4）。社叢に入ると、クスノキ *Cinnamomum camphora* (L.) J.Presl, エノキ *Celtis sinensis* Pers., イチョウ *Ginkgo biloba* L. などの巨樹が生育していた（図 5）。特にクスノキの巨樹が 8 株まとまって生育している例は県内にはないらしい。境内にはクワズイモ *Alocasia odorum* (G. Lodd.) Spach などの南方系の植物も生育していた。



図 4 案内人の大木公彦氏と揖宿神社の社号標。



図 5 揖宿神社のクスノキ。



図 6 採掘したカオリンを捏ねて団子状にする参加者（真邊 彩氏提供）。

午後 2 時頃に指宿市の噴気変質帯でカオリンを採掘した。カオリンは白色の粘土鉱物で化粧品や製紙用の填料にも利用されている。熱を帯びた山の斜面から白い煙が立ち上っており、大木氏らがハンマーで斜面を削ると間もなくしてカオリンが表出した。採掘直後の温かさが残るカオリンはまだ柔らかく粘り気があり、手のひらで捏ねると団子状にまとめることができた（図 6）。その後は池田湖を見学し、午後 4 時に鹿児島中央駅で解散した。

今回の巡検では「火山銀座」と呼ばれるほど火山が多い指宿市を訪れ、火山堆積物から形成される地形や地質と南薩の植生を学ぶことができた。さらに、火山活動による災害と恩恵の両面から自然環境と人との関係史への理解を深めることができた。

末筆ながら、今回の巡検を準備いただいた大木氏と世話人の皆様に厚く御礼申し上げます。また、真邊 彩氏、上中央子氏には、本稿掲載の写真を提供賜り深く感謝申し上げます。

引用文献

指宿市考古博物館. 指宿まるごと博物館. <https://www.city.ibusuki.lg.jp/marugoto/> (2024 年 2 月閲覧).
 (〒060-0810 北海道札幌市北区北 10 条西 7 丁目 北海道大学大学院文学部 Graduate School of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University Kita 10, Nishi 7, Kita-ku, Sapporo, Hokkaido, Japan, 060-0810)